

art winter 1995 vol.22-3 vision

特集：ニューヨーク・アート・シーンⅡ

もうひとつのニューヨーク——マイノリティのアート

ブロンクス美術館

彫刻家とエトロ・カシエツラ

Special Edition

New York Art SceneⅡ

Bronx Museum of the Arts

Interview with Pietro Cascella





無題 1992 ミクストメディア 183×122cm



無題 1992 ミクストメディア 183×122cm



無題 1993 ミクストメディア 30.5×30.5cm



無題 (ビルボード) アルミニウムにエナメル 366×146cm

Mark Sheinkman



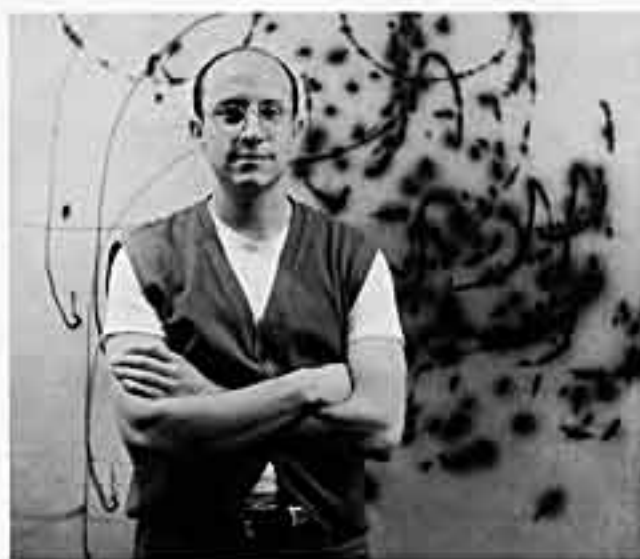
無題 1992 ミクストメディア 183×122cm



無題 1994 ミクストメディア 61×40.5cm



無題 1994 ミクストメディア 40.5×61cm



群の中から選ばれてチャンスを手にしたのだ。展覧会も間近に控えているし、ブルックリン美術館が作品を一点買い上げてくれた。シェイクマンの手法は、感光乳剤でコーティングしたキャンパスの一部に光線を当てて露光させるというもので、ペインティングと写真の境界を曖昧にしているのが特徴だ。作品はサイズが大きく、キャンパスを現像すると見えてくる身振りの跡を示す黒っぽい筋と落書きのような線には、電子顕微鏡の世界のような科学的な感覚と、ジャクソン・ポロックのドリップ・ペインティングのように強く情緒に訴えてくるものがある。とはいっても、小さな物を拡大して見せているわけではなく、ただマークの動作の跡があるだけだし、抽象表現主義には欠かせない絵具とキャンパスの相互作用はなく、ただ感光剤を塗ったキャンパスの表面に光線が作用をおよぼすだけのことなので、どちらの説明もびったりとは言いがたい。マーク自身、作品は自分の身体とその動きから生まれてくるので、とても私的なものと感じている。あまり独りよがりと思われなければいいと本人は願っているほどなのだ。

光のペインティングはとても美しいと思うとマークに話したら、「こういう状況では、なにかを美しいと形容するのは、やんわりと大したものではないと言うのと同じだ」という返事が戻ってきた。どういう状況なのかくわしく説明してもらうことにした。「アーティストは改心した連中に、政治的なアートをつきつけて説教してまわってるわけだ」

(この言い回しはどこかで耳にした)。政治的な動機から制作されたインスタレーションにも見るべき点がないわけではない。たとえばユダヤ人虐殺の犠牲になった人たちの靴だけを一部屋に並べたワシントンのホロコースト博物館の展示は成功例の最たるものだろう。人はそれを見つめて、じっくり考えることが出来る。しかし、政治的なインスタレーション作品がもてはやされるようになった際には、評論家の力が働いているのではないかとマークは言う。純粋な視覚性のみ頼った作品を言葉で扱うのはとても難しいけれども、政治的なインスタレーションなら評論家も興味